

おたがいを認め合つて

小 六

私はペルーと日本のハーフです。だから、名前はカタカナで、周りの人より濃い^こはだの色、ほりの深い顔をしています。でも、日本で生まれ、勉強はがんばるように言われてきたので、日本語に不自由はしません。漢字も書けます。計算は好きで自信もあります。

生まれてから日本にいたので、小学校に上がるまではハーフでいることを気にしていませんでした。みんなと同じだと思つていました。でも、小学校に上がると、いやがらせのようなことを受けました。ランドセルの中に小石が入っていたり、変な歌詞の歌を歌わ

れたり……。思い出すとたくさんあり、学校に行くことがとても苦しくなりました。私は自分の名前や見た目のせいなのかなと考えるようになり、名前も見たい目も大嫌いになりました。親や先生、友達にも相談しました。みんな一生けん命助けてくれました。親は話を聞いていっしょに学校の先生に相談してくれました。先生は話を聞き、よく見て、嫌^{いや}なことをしていた人を注意してくれました。友達は「やめなよ。」と止めに入ってくれました。そのおかげで、嫌^{いや}なことをしていた人に謝つてもらい、嫌^{いや}な出来事は無くなり、解決することができました。でも、そのころを思い出すと顔が熱くなり、とても嫌^{いや}な気持ちになります。

私にとっては嫌^{いや}な経験ですが、良い

こともありました。それは、そのとき助けてくれた友達と親友になれたことです。その子に、

「私がハーフだから嫌なことをされたのか、見た目で判断してしまおうのは仕方がないのか。」

と聞いてみると、昔、嫌なことを注意してくれたときと同じように、はつきりとした言葉で、

「私は見た目で判断するのは間違っていると思う。」

と言ってくれました。すると不思議と気持ちがとても楽になりました。そして、自分に自信がもて、名前や見た目を嫌がっていた自分のことを後悔しました。

私はこの経験を通して、相談することの大切さを学びました。困っていた

ら声を出し、自分のことを理解してもらうことの大切さを学びました。一人の言動で苦しむ人もいれば、助けられる人もいるということを学びました。

六年生の社会では、日本国憲法には「基本的人権の尊重」があり、これは「人が誰もが生まれながらもっている自由に人間らしく生きる権利」であるということ勉強しました。基本的人権をもったくさんの人が、おたがいに認め合い、助け合って暮らすことの大切さについて学びました。どんなことなのか考えてみると、シヨツピングモールでの出来事が浮かびました。それは、私よりはだの濃い男性に、はしゃいでいた幼い女の子が走ってきて、ぶつかってしまった出来事です。私は「どうなるのかな。そのままにげるの

かな。」と思いつながら見ていました。すると保護者らしき人が来て、頭を下げて謝り、相手の男性も笑顔でいるのが見えました。私は安心しました。なぜなら、見た目で判断しないで、自分の間違った行動を謝り、おたがいが笑顔になっていたからです。おたがいを認め合う世の中とは、こういうことなのでしょう。うなと思いましたが、そんな世の中、なるためには、自分が見た目で判断していないか、相手の気持ちになり、気にしていることを口にだしていないか、しっかりと考えて行動することが大切だと思います。五年生で学習した金子みすゞさんの、『みんなちがって、みんないい』という詩のように、人間は見た目や考え方はちがっても、みんな

な一つの命をもっている同じ人間です。だからこそ「おたがい」を「認め合う」ということが大切なのだと思います。

私の名前のアイは、愛があるという意味で、ペルー語で「大事にしたい」という意味があります。今では昔大きらいだった名前も顔つきも自分らしき人として好きになりました。ペルーと日本人のハーフ。それは私です。